

神奈川文芸賞 [2022]

「こんな逃げられるはずがない。そう気づいてしまつたら、あともう怖いものなんてなかった。大学のオリエンテーションを欠席した私は、母を自転車のつろろにのせて、海沿いの国道を走っている。母は今朝まで精神科の閉鎖病棟に入院していた。時間の外出許可を待って待っていた彼女のせて、私は休むことなくここまで走ってきたのだ。雨が降りそうな日が続いていた。一心不乱にペダルをこいだせいで、私はじっとり汗をかいていた。「ちょっとゆづさん。ちゃんとつかまってるか?」私が言うと、一度離れた手が腰に置かれるのを感じる。母は、だてて校がきれい、と散歩でもしているかのように言った。母は自分の意思で閉鎖病棟に入院していた。鍵がかかれた扉のむこうにある、窓が三センチくらいしか開かない病室は、たしかにいまの母には必要なものなんだと思う。

「のりこに、怒られちゃうね」と母が叔母の名前を口にした。叔母は母の妹だが、母よりもずいぶん年上に見えた。二人はお互い似ておらず、華奢な母とは対照的に、叔母は大柄だった。叔母は私のことを嫌っていた。実際にその口にするとはなかったが、彼女が私にむける視線はいつも冷たいものだった。母がお酒を飲むことを止められなくなった。叔母はすべてを私のせいにした。それからずっと、私は叔母に会っていない。「ゆづさん、おしり痛いよね」うづん、とまたのんびりした声が聞こえる。私は母のことが好きだった。そして、母も私のことが好きだった。母のおまりに気持ちよそそな鼻歌は、私の心を軽くしていった。

国府津を過ぎて長い橋を渡ると、小田原まではあつとつと遠かった。駅前には観光客でにぎわっていて、濃い海のおいがした。私は自転車を止め、母と小田原城にむかって歩いていく。満開のソメイヨシノはたしかにとてもきれいで、たかさんの人が立ちまわって写真を撮っていた。曇り空は、それでもきれいな水堀に桜をうつしていった。私が指さした喫茶店の扉を、母が開けた。ベルの音が鳴って、レジ台のむこうから老婦人が顔をのぞかせた。「このじやいませ。さう言っているから、彼女はあつとつと顔を笑って笑った。いい子でお持ちです。母のつろろから店内を見れば、コーヒーの香りの奥に、弟がちらりと顔を覗かしていた。「ゆり」と母が声をかけるのとほとんど同時に、弟がぼつとひりかえる。彼は母親ゆずりの細い眉を歪めて笑った。母は弟がすわっている席に近づき、彼を見つめたあと、ふつと微笑んでちいさな頭をなでた。「ゆり、温泉に行く」母が言うと、「うん、かいちゃんと言った」と弟はうなづいた。私が二人のつろろへ行くと、弟がこちらを見つめる。「いいじゃん、たね」と母は弟のシャツをひっぱって言った。「かいちゃんね、これがいいよって」弟が私の名前を呼ぶたびに、「これでよかったのだ」という気持ち強くなっていた。二週間前に弟は卒業式をむかえた。私がアルバイトの休みをとれなかったせいで、弟は退園の時間にならぬまひりぼつちだった。そして、彼はきつとつじつとつじつと、そのせいでちいさな目「おめい

う」とか「がんばったね」などと言われている友達を見ていたにちがいがなかった。そのことを思うだけで、私はほとんど泣きそうになった。弟の入学式に母は出てもらわなければならない。私はすべに母の入院する病院へむかった。弟の前には、半分ほど残ったりんごジュースとガラスのつづわがある。りんごジュースは、こぼれかたの注ぎ文が読めたものだった。「これ、なにかたのんだの?」つづわに添えられたスプーンには、白いものがたまっていた。弟が顔をあげてなにか言おうとした。「あ、それね。私がさしあげたの。いい子ですわってたものね。カウンターのなかから老婦人が言った。弟は白い頬を赤くしてこちらを見ている。「すみません、お支払いします。私は財布をだして言った。

「いいよ、馳走したんだから。ねえ。笑いかけたら弟は首まで真っ赤になってしまった。「ほらゆり、なんていうの。私は弟を立たせてその背中を押した。彼は小声で礼を言い、私にびつたりとくっついてしまった。外へ出るぞ、空はちいさんと暗かった。「降ってくるかな」私が見あげて言うと、弟も目を細めて空を見た。「雨降ったら、温泉はいいね?」そんなことないよ。大丈夫」私は弟の手をとった。細いからだのわりに、弟の手はわりか、すべすべと滑っていた。「ゆり温泉はじめてたね」と母も空を見て言った。

「私もひびきかただ。中学のとき以来」「じゃあ、もう八年ぶりだ」と母は目を丸くして笑った。よわわかっていないらしく、弟もつられて笑った。「ねえ、そんなにのんびりしないでよ。私は母に顔をよせる。「連れ戻されちゃう」

はいはい、と母は弟の手をとって歩きたした。久しぶりに会えて嬉しいのか、弟は何度も母を見あげた。「今日ね、すこぶはやくおきたの」と彼は声をはずませた。かいちゃん、すくと歩いてね。かいちゃんか待っていて言うから、ぼく待ってたんだ。弟は喫茶店でアイスを食べたこと、きちんと礼を言ったことを誇らしげに話す。母は、つないだ手がゆるれるたびに、にこりとほほ笑んで弟の顔を見た。小田原城のわきの道で、さつきとは別のたかさんの人が写真を撮っていた。「きれいだねえ。花さかりね」母は弟にむかってつぶやいた。いつのまにか、弟は私の手を離している。彼は母の真似をして校を見つめた。「ぼくね、小学生になるんだ」と弟はちいさな声で言った。

小田原駅には真新しい商業施設があり、揚げた魚や団子が売っていた。いなり寿司の店の前には行列ができていた。私は駅の構内のすみに、手をつないだままの二人を立たせた。「待っていて。切符を買ってくるから。弟の短い髪をよる。すべすべと滑るからね」一度ひりかえると、母は行きかた人越しにまた暗い空を見ていた。おおきなキヤリアーバッグと母親にはさまれた弟は、こちらにむかって手をふった。箱根登山鉄道の切符を一枚買った。警察官を思わせる警官の姿に、お札をしまう手が少しゆるんだ。切符を手に戻ると、立っていたのは弟だけだった。「ゆづさんは?」慌てた気持ちかばれないように聞くと、「このつづわ、このつづわ、このつづわ」

「このつづわ、このつづわ、このつづわ」弟は二本の指をちびるにつけてみせた。なんてことだ。これじゃ本当に旅行にきていただけみたいだ。私は仕方なく弟の隣に立った。「これ、ゆりのだよ。ちゃんとしてね。切符

を手渡すと、弟はしんみりな面持ちでそれを受けとり、スポンのポケットにいてボタンをこめた。喫煙所が、ものすこせまの。面会のとき、母がおかしそうに言っていたことを思い出す。壁にはたばこ火をつける穴のようなものが開いていたらしい。私が困った顔をしていると、それを見た母はまた笑った。閉鎖病棟はおかしなところだった。ただひたすらに廊下を歩かざる者たち。私にお菓子をすすめてくれたおじいさんは、にこりと笑ったままタツに連れていかれた。行きかたう人のむこうに母の姿が見える。「ゆづさん、ふわりと煙のにおいがした。母は弟にむかってつぶやいた。いつのまにか、弟は私の手を離している。彼は母の真似をして校を見つめた。「ぼくね、小学生になるんだ」と弟はちいさな声で言った。

おどろいたことに、彼らほとんどは外国人だった。そして、彼らは弟がすぼり入ってしまっているバックパックを抱えていた。私は座席の一番しに母と弟をすわらせて、キヤリアーバッグをつかんだまま一人の前で立った。おおきな荷物や乗客にいかまされた弟は、華奢な肩をすべすべと滑らしていた。八年前、その座席にすわっていたのは中学生の私だった。それはまた弟が生まれる前のこと、私はそのときのことを覚えていた。小田原からたかのか、箱根湯本だったのか、駅の名前は思い出せない。両親にはさまれてすわっていた私の前には、若い男女がいた。二人の声はやたらとおおきく、男は得意げに話しながら女の肩を抱いていた。私は、男がほかの乗客の視線に気づいていることを知っていた。そして彼が、その視線のためにおおきな声を出しているという。私の父もまた、彼を見ていた。父はおそろしい人だった。外見だけではわからなかったかもしれない。彼はよく笑ったし、人を笑わせることも得意な人だった。ただその内側に、なにか冷たくて暗いものをかくしていた。その暗いなかから外に出るとき、父は怒鳴り声をあげ、彼のまわ

りにあるものは壊れてしまふのだ。結婚してゆりがつまれても、父はなにも変わらなかった。普段は温厚な父の頭に血がのぼるとき、母は泣きながら叫び、弟は金切り声をあげた。私は立ちつくしてそれを見ていたが、耳の中の鼓動はいつも怒号や泣き声を聞かなくなっていた。いつだったか、父がテレビのリモコンを壁に投げつけ、それがはねかかって弟の頭にあたった。たしか弟も私も肩を出していたから、それは夏の夜のことであったと思う。弟にリモコンが当たった瞬間、私は父に飛びついて、右の頬を殴った。だれかを殴ったのはじめてだった。皮膚の内側にある骨の感覚や、私をつき飛ばし、唾と怒号を浴びせて出ていった父のつろろすがたは、いまでも鮮明に思い出すことができる。一番忘れられないのは、その瞬間に父への怒りや、人を殴ったことへの罪悪感を覚えたことだ。私はずっと、力がみなぎり、弟を守ったという誇りを感じていた。からだが熱くなったり冷たくなったりして、強い耳鳴りがした。とうとう降りだした雨が、少し開いた窓から冷たい風を吹き込んだ。八年前のあのとき、母はなにを考えていたのだろうか。私はその顔も思い出さず、どこかできない。十二歳の私は、ただ父の手を見ていた。彼のひびに置かれたそれが、固く握りしめられたことがないように、願っていた。私は動きだした車の中で弟の頭に手をのせる。彼は不思議そうな顔をした。父が投げたリモコンは、弟の額の生え際に白いちいさな傷をつけた。私は傷をなでながら、あのときの勇気や誇り(?)を思い出さず、箱根登山鉄道は、私たちをあととつづまに山の中へと送った。

箱根湯本の駅は、いたるところが濡れていた。弱い雨と立ちのぼる湯気が合わさって、苦しいほどだった。弟が息を吸いこんで顔をしかめている。「へんなにおいする?」うん、これなんのにおい?」「硫酸だよ。温泉のにおい」弟は「いお」と、声を出さずに言った。私たちが少し離れたところ、母はきやかな通りをながめていた。「このへ、お屋でもうかなくて。私が聞くと、さうねえ、と気のない返事をする。小田原を出たあたりから、母はしゃべらなくなりました。その青白いほほは、あたりの湿度で透きとおるようになった。駅から出た私たちが、いろいろな食べ物や土産物の店を通り過ぎて歩くと、雨はほとんどやんでいった。私は何度もひりかえしたが、それはついでついで二人の気配がまるでなかったからだった。和服を着て前掛けをつけた女が弟に笑いかけた。通行人を誘導する警備員は、警棒で足をひしりと叩いていた。ふと、弟が昔のはえた欄干に手をすべらせた。そのまま歩いて行こうとするので、私は彼を立ちどまらせて、その手をきれいに拭きとる。顔をあげると、母がこちらをじっと見ていた。吹きおろす冷たい風が硫酸のにおいをかき消すたびに、私は少しずつ不安になっていた。

弟がソフトクリームを食べたがるので、パニール味のを買ってやった。母にもたすねたが、彼女は首を横にふるだけだった。ポケットのスマートフォンがふるふる。私はソフトクリームをなめる弟の隣で、メッセージを開いた。(病院から連絡がありました。優子と一緒ですか。いまここにいますか)叔母からだった。返事を打とうとすると、またメッセージが届く。(病院には、家に帰ってきてしまったので警察には連絡しないようにと伝えていきます。すべに返信ください)私はほっとした。たしかに、警察沙汰は叔母が一番嫌がることだろう。でもいまは、それが都合よくか

つた。(一緒にいます。場所は言えません。ゆづさんはい。明日病院に送っていきます)私は「二回目の「ゆづさん」を消して、メッセージを送信した。コートをかじる弟のむこうで、母は壁によりかかっていた。今度は、弟の口のまわりをきれいに拭きとる。彼は赤くなつたくちびるで笑った。「ぜんぶ食べられたの?」「おいしかった」「さむくない?」私が聞くと、弟はきよとんとする。「うん、さむくない」私は母に、行こう、と声をかけた。母はなにも聞いてはなかった。登山鉄道はほとんど満員だった。私は、二人組の男性と若い外国人女性のあいだに弟をすわらせた。母はつり革にからだをあずけていた。その白い腕を見ていると、私まで疲れてしまったような気がした。むきだしになった弟のひびに、外の光がちらちらとあたたかっていた。スピードをおとした車両が、駅に着く前にとまってしまった。「スイッチバック、ついでつづまのよ。母が、つづま、弟は聞きなれないその言葉をくりかえした。「鉄道がね、山をこう、じややぐにのぼるの」と母は人差し指を動かした。弟はその指を見つめ、窓の外をながめる。車両が来た道を戻るように走りだした。母は、ね、と言って人差し指をもう一度動かすと、まただまりこんでしまった。ケールカーのアナウンスが聞こえたあと、私たちは強羅の駅に着いた。外へ出た弟は寒さにかふるえていた。私はスマートフォンで宿までの道を検索しようとするが、回線はなかなかつながらなかった。母がキヤリアーバッグから上着をとりだして弟に渡す。私たちは宿にむかって歩きたした。駅前の商店には、手書きの値札がついたお菓子が並べられていた。

「せとかが売っているね。店先のかごに入った果物を指して、母が言うと、弟がそれをのぞきこんだ。店の人は少しこちらを見たが、なにも言わなかった。キヤリアーバッグをひいて歩く私のつろろを、手をひいた二人がついてくる。濡れた歩道はすべりやす、土のにおいがすつと続いた。宿に入ると、髪をきれいに束ねたスタッフがほからかに挨拶をした。弟は、色とりどりの万華鏡や奇木細工をちらりと見た。「二泊二日予約した。城田です。私はスタッフにつづる。三名までですね。こちらに記入をお願いします。と、スタッフは用紙を差し出した。私はふるふる手で空欄を埋めていった。「城田」は私たち三人の苗字ではなかった。私が美母の旧姓を口にするのを、母はきいていなかった。スタッフについていくと、長い廊下には琴の音が

「せとかが売っているね。店先のかごに入った果物を指して、母が言うと、弟がそれをのぞきこんだ。店の人は少しこちらを見たが、なにも言わなかった。キヤリアーバッグをひいて歩く私のつろろを、手をひいた二人がついてくる。濡れた歩道はすべりやす、土のにおいがすつと続いた。宿に入ると、髪をきれいに束ねたスタッフがほからかに挨拶をした。弟は、色とりどりの万華鏡や奇木細工をちらりと見た。「二泊二日予約した。城田です。私はスタッフにつづる。三名までですね。こちらに記入をお願いします。と、スタッフは用紙を差し出した。私はふるふる手で空欄を埋めていった。「城田」は私たち三人の苗字ではなかった。私が美母の旧姓を口にするのを、母はきいていなかった。スタッフについていくと、長い廊下には琴の音が

「せとかが売っているね。店先のかごに入った果物を指して、母が言うと、弟がそれをのぞきこんだ。店の人は少しこちらを見たが、なにも言わなかった。キヤリアーバッグをひいて歩く私のつろろを、手をひいた二人がついてくる。濡れた歩道はすべりやす、土のにおいがすつと続いた。宿に入ると、髪をきれいに束ねたスタッフがほからかに挨拶をした。弟は、色とりどりの万華鏡や奇木細工をちらりと見た。「二泊二日予約した。城田です。私はスタッフにつづる。三名までですね。こちらに記入をお願いします。と、スタッフは用紙を差し出した。私はふるふる手で空欄を埋めていった。「城田」は私たち三人の苗字ではなかった。私が美母の旧姓を口にするのを、母はきいていなかった。スタッフについていくと、長い廊下には琴の音が

神奈川文芸賞

小説部門：準大賞
春来たりなば
堀田 花



イラスト／渡邊末夢 (県立相模原弥栄高校美術部2年)

「かいちゃんね、これがいいよって」弟が私の名前を呼ぶたびに、「これでよかったのだ」という気持ち強くなっていた。二週間前に弟は卒業式をむかえた。私がアルバイトの休みをとれなかったせいで、弟は退園の時間にならぬまひりぼつちだった。そして、彼はきつとつじつとつじつと、そのせいでちいさな目「おめい



神奈川文芸賞 [2022]

現代詩部門：準大賞
日々／廣瀬 充

電車が揺られていく
まだ明け切らない白い朝を
電車で揺られていく
座席を埋める乗車客は
どこを見つめるでもなく
俯き加減に ただ揺られていく
駅に止まる
客は 立ち上がる時に少しだけ 足に力を入れて
そして すくくと立ち上がる
ああ そろそろ みんな 溜めていたんだ
ホームに降り立つ活力を
今日一日を強く踏ん張れるような
そんな活力を
電車で揺られていく
席に座る乗車客はまはらで
月を仰ぎ見ながら
どこか上の空で ただ揺られていく
駅に止まる
客は 立ち上がる時に少しだけ ふーと息を吐いて

流れてきた。案内された部屋の扉のむこうには、二つのベッドとおおきなソファ、化粧台と冷蔵庫があった。弟があたりを見まわると思ったが、彼はそうしなかった。ただガラスの窓のしに、ちよちよとあふれる湯を見つめていた。人が少ないうちに弟を大浴場につれていく。そう思っただけで、かけようとしたとき、うしろから母がなにかつぶやき、ふりむくと、母は鏡を見ながらほほをこすったあと、私を見て言った。

「すきを見ていいか」

バルコニーに出た弟は、湯に手をひたしていた。

「明日は、晴れるといいね。仙石原にむかうタクシーのなかで、母が言った。彼女はしばらく窓の外を見ていたが、ふと弟の顔に手をあてた。

「はいね。もう小学生になるんだね。弟は嬉しそうに笑った。タクシーの運転手が、おめでどういいます、と母に言う。うちにも八歳の息子がいます。ね、子供は知らぬ間にどんどんおおきくなる。ほんと、と答えた母の声は運転手にとどいた。うか。母の顔はもうずっと悪くもなかった。すきません、とめてください。やっぱり引きかえしていい。私は何度も言うことになる。でも、そうしなかつた。弟が心地よさそうに母にもたれかかっているのを、ただ横目で見ていた。

タクシーは木々のトンネルを抜けて、広い駐車場で止まった。運転手も二度、おめでどう、と言う。弟は恥ずかしそうにおでこをかいた。砂利を鳴らしながらタクシーが走り去っていく。母は、ちた、と弟の手をひいて歩きたした。天気の良いか、人は少なかった。茶屋の扉には休日の札がかかっていた。私たちはまだまま店の前を通りすぎた。鳥の鳴く声や遠くから聞こえる。あたりの景色はほんやりとくすみ、夢の中を歩いているようだった。うつむいた視界の中で弟が駆けだすのを見たとき、母がほら、と行ってふりかえった。遠くから背中をむこうに、すき草の原が広がっていた。母はおかしそうに笑っている。それは、私が思い描いて

と弟の顔がほんやりとつる。金色にゆれる穂は少しもなかった。

「ひっくり返した？」母が言った。思っていたのちがうでしょ、と。地面に残った短いすきはほとんど黒に近い茶色で、それがすくすくついでいた。「野焼きをしたのね」

母も景色をながめていた。

「のやき、ってなに？」弟は、また母の手を握って聞いた。

「すきに火をつけて、燃やしてしまうの。悪い虫や雑草も。そしたら、またきれいなすきの草原になるよ」。しばらく困ったような顔をしていた弟は、しやがみこんですきに顔を近づけると、手のひらでそれをさわった。彼の足元の木材は、焦げてくろくろく炭のようになっていた。

「知ってたの？」すきをなでる弟を見ながら、私はたずねる。

「うん。ほかの患者さんが話して」

焼けあとにある白い道を、はしまで歩こう、と母は言った。立ちもまわって遠くをながめたり、うすくまわって砂をむく弟と、私たちは道を進んだ。行きどまりになってふりかえったとき、つづみ山の上のところに、青い空が少しだけ見えた。「写真を撮ろう」と私は二人に呼びかけた。わたしはいいよ、と母は取り合わない。私はこちらにヒースサインをむける弟の奥に、母の横顔を少しうつらした。

「八年前は来なかったね、」。引きかえしてきた道がおわるとき、私は言った。母はうつむいてこちらを見る。私がすきに驚いたときと、同じ顔で笑った。

「あなたたちは、私を入学式に出したがるのね」

あなたたち、というのには私と父のことだ。私が中学生になった日、母は、私の母になった。「だつてやっぱり、母親に見てほしいと思っじゃない」私が言う。そういつものなかな、と母はつづみ山を宿に戻ると、母は横になってしまった。窓には私

「お姉さまでしたら、たったいま外へ出られましたよ。ロビーに飛びだした私に、スタッフが言った。自動車のすきまから外へ出ると、そこにたばこを吸う母がいた。

「あら、かい」

母の声と手は悲しいほどにふるえていて、私はさうと目をそらした。疲れたんじゃない？と、顔をそむけたままたずねる。返事がないので母を見ると、彼女は上着に顔をうずめていた。それを見た私は泣きそうになってしまった。大丈夫？ともう一度たずねたとき、母が顔をあげた。その瞳には、あかりがきらきらとついでいた。

「ゆりが心配するから、戻ろう」。そう言いつ、母は宿に入っていく。深い森がどこまでもついでいた。夜の山は黒く、遠くは少し薄く黒くなった。

「お姉さま、しんじやう？」

弟は私をまっすく見て言った。彼の浴衣にプリントされた草漕から、私は目が離せなくなる。

「ゆきさんは、死なないと思っよ」

弟は、草漕を握りしめてうなずいた。ほらもう寝ないうと、と行って私は弟をベッドに戻し、布団をかけた。部屋の壁には、スツとちいさなフレザーが吊るしてあった。

結局母は朝まで洗面所にこもり続け、明るくなる頃にやうと横になった。私は冷たい窓にもたれて、二つ並んだ布団の山を見ていた。

早朝のホームにはだれもいなかった。母が二回目の途中下車をしたとき、私たちが入れ替わりに数人の客が車に乗っていった。フレザーを着て黒のローファーを履いた弟は、ホームのベンチに腰かけている。彼の隣にある紙袋には、箱詰めされた朝食が入っていた。

駅ホームは朝日でもがしいほどだった。やってきた車両に乗ると、私はたくさんの荷物を抱えて、母と弟のむかひにする。二人があまりによく似た顔をするので、私は思わず笑ってしまった。母が不思議そうに私を見ていた。

長い時間をかけて最寄りの駅に着くと、そこには見慣れたファミリーワゴンがあった。運転席のドアの横に、腕を組んだ叔母が立っている。足を引くずりながら歩く私たちを見た叔母は、なにかな言おうとしたが、それよりも早く母が口を開いた。

「入学式に行つてから」

母は私にむかって言った。「病院に戻るの、そのあと」

まるで、それ以外は認めない、というふたつだった。私は母と弟を後部座席にのせて、ばたん、とドアを閉める。驚いた弟は顔をほっとあげた。

「あの、私はうちに戻ります。荷物もあるのよ」

そう、と言いつ、叔母はあつというまに二人を連れていってしまう。去っていくワゴンをながめながら、こみあげてくるのが、後悔なのか寂しさなのかはわからなかった。

家に着くと、私は荷物を放りだして、玄関にすわりこむ。足は痛み、髪の毛は安いシャンプーのせいできしきしといたリボンにつくく廊下には、昨日の朝思われてしまったのか、弟の帽子が落ちていた。私はそれを拾おうとして、手を伸ばした。帽子を持ったまま横になり、天井をながめているうちに、まぶたが重くなつていく。隣の住民がドアを開める音が、遠くで聞こえた。

はっと目を覚ましたとき、部屋のなかはずっかり

講評

蜂飼耳

朝晩の電車による通勤・通学の情景が、鋭くも優しい視線のもとに切り取られている。駅に停車したとき、乗客は少しだけ「足に力を入れ」たり「ふーと息を吐い」たりして立ち上がる。そう言われると、確かにそうだ、と作者の観察に納得させられた。一日の始まりと終わりに人々を包む空気感がありありと浮かぶ。最後の連では「電車で揺られていく」ことと生きていくことそのものが、びたりと重なって、さりげない余韻に繋がる。

講評

朝井リョウ

まず、私の手元に届いた最終候補作の中で、この小説と似た空気感のもの一つもありませんでした。非常に絶妙な緊張感が物語全体を貫いていて、その時点で既に誰にも奪われないオリジナリティを獲得している小説だと感じました。随所随所で、まるで誰にも気づかれない落とし物のように、少し気になる描写が差し込まれます。それらは最後まで完全に解明されることがありませんが、不思議と、解明をモチベーションとせずとも読み進められる魅力がこの小説にはあります。解明に代表される気持ちよさに頼らず読者を導くというのは、それを成立させる文章力があってこそです。著者は既に、どんな場面でも自分の温度感に染めてしまえる筆致を手に入れている気がします。それは今の私が何より欲しいもので、羨ましく感じます。

作品掲載に当たっては、原文通りを原則としていますが、入賞作品は順次掲載します。

今回は11月の予定